

# 同一視編成理論の発達理論における意味

## The Role of Consolidated Identification Theory in Developmental Theories

荻本 快 OGIMOTO, Kai

● 国際基督教大学大学院教育学研究科  
Graduate School of Education, International Christian University



同一視編成, 対象表象, 青年期初期

consolidated identification, object representation, early adolescence

### ABSTRACT

青年期初期の同一視編成は、「子どもの同性親の表象が異性親の表象よりも強い同一視の凝集性もしくは一貫性を持つ」と定義される (Besser & Blatt, 2007)。本論は、同一視編成理論の発達理論としての意味を理論的に明瞭化し、臨床的、実証的研究の道筋をつけることを目的とした。同一視編成理論は、父—母—子の三者関係を前提として、青年期初期の同性親と子の二者関係に焦点化したことに有用性を見出せる。本理論によって分離个体化の葛藤の浮上から自我同一性の探究への転回メカニズムが明瞭になると期待できる。理論の体系性を評価したところ、同一視編成が青年期初期における性別同一性の展開に与える影響を、精神的発達に基づいて理論を再構成していく必要性が浮上した。今後は、同一視編成の発達促進的意味について、実証的な検討を行っていくことが必要である。

Consolidated Identification is the theory that a child should have greater coherence in the representation of the same-sex parent than in the opposite-sex parent in early adolescence (age 11-13) (Besser & Blatt, 2007). The purpose of the present article is to clarify the position of consolidated identification theory in the context of adolescent developmental theories, and to indicate future prospects for clinical and empirical research. The consolidated identification theory is based on a triangulate relation, and focuses on the dyadic relation between child and his/her same-sex parent; the essential significance of this theory. The theory elucidates the dynamism from reactivation of the separation-individuation anxiety to exploration of ego identity. An evaluation of the systematization of the theory shows the necessity for reconstruction of the effect of consolidated identification on gender identity development in early adolescence, based on psychosexual development theory. Further empirical research is needed on the developmental meaning of consolidated

identification in early adolescence.

## 1. 問題と目的

精神分析理論、認知社会理論、発達理論にもとづき、Besser & Blatt (2007) は青年期後期に確立されることが期待される自我同一性の発達に、青年期初期の段階で「同一視編成 (consolidated identification)」の発達が欠かせないとする臨床理論を提唱し、これを実証しようと調査研究を行った。この研究において、彼らは同一視編成を、子どもの同性親の表象が異性親の表象よりも強い同一視の凝集性もしくは一貫性を持つこと、と定義している。これは精神病や重篤な青年期心理障害の中核的問題とみなされる自己同一性崩壊危機 (Masterson, 1972) が多発する青年期初期の重要な発達課題とみなされるが、崩壊反応に注意が向く陰となるためか発達理論としての注目を集めるに至ってはいない。

同一視編成の発達促進的な意味について、Besser & Blatt (2007) はこの時期の愛着研究 (Avery & Ryan, 1988 ; Ryan & Lynch, 1989) から、個性化 (individuation) と自律性 (autonomy) を押し進める発達促進的機能があることを主張した。精神的な人格発達理論は、青年期初期の成熟課題は、男子にとっては母親への依存的なつながりを廃し、そのかわりに父親への成熟した同一視を確立することであり、女子にとっては母-娘関係における発達早期の依存から、母親への成熟した同一視へ転換すること (Blos, 1962 ; Deutsch, 1973 ; Jones, 1948 ; Lample-de Groot, 1927, 1960 ; Ritvo, 1976 ; Ticho, 1972a, 1972b) だと、早くから主張している。その理論背景のもと、Besser & Blatt (2007) は発病や重篤な心理障害に陥らずとも、青年期初期に同一視編成の確立が未完のままに異性親を理想化すると、男女双方とも同一性の凝集に限界をきたし、行動上及び情緒の問題に影響すると警告した。これらの視点は、現代青年期臨床に示唆する所極めて大なるものがあり、その理論的、臨床的妥当性はもとより発達理論に明確

にこの理論を組み込むための実証成果が求められる。

同一視編成理論の研究をさらに押し進める第一歩として、本論では、同一視編成理論の発達理論としての意味を理論的に明瞭化し、臨床的、実証的研究の道筋をつけることを目的とする。

## 2. 同一視編成理論の発達理論上の位置づけ

父-母-子の三者関係を前提として、子どもから大人になる、すなわち家族から独立する心理社会的に困難な課題を背負う青年期発達展開を起動する力動的メカニズムの鍵となるのが同一視編成であるとするなら、その発達理論上の意味は大きい。青年期発達を押し進めもし、そこで停滞もしくは退行をも招く分水嶺を超える青年期発達第1位相の発達課題 (developmental task) とみなすことになるからである。分水嶺の危機は、青年期独特の不安、抑うつ、身体化に彩られる内向的問題と、反抗、非行、攻撃的行動化といった外向的問題が増加し (Roberts, Andrews, Lewinsohn, & Hops, 1990 ; Moffitt, 1933)、両者には極性化が生じやすい (Acchenbach, 1991)。これら二方向の課題に分裂する危機が、正に青年期の最初に体験される発達ラインの分水嶺である。Masterson (1972) の説明する自己同一性の崩壊不安は、この危機の現れを警告するものと言ってよからう。

このような青年期に増加する特有の分裂による自己喪失の問題は、青年期独特の発達のスイッチバック的退行現象なのであろうか、すなわち健康な発達ライン上の問題なのであろうか。臨床的には、現象が多様に報告されるものの、発達ラインにおける力動やメカニズムの説明は十分に体系化されているとは言えない。問題が幼少期からの遅延した自我発達の問題なのか、あるいは潜伏期の失敗なのか (Blos, 1962)、その査定基準が明瞭ではないために診断及び治療的介入も種々混乱が生ずる (Kotani, 2004)。

Masterson (1972, 1985) の自己同一性理論は、青年期に境界例様態を示す患者の病理構造に着目し、青年期のはじめに变化する内的対象関係に焦点をあてた所に発している。彼の主張は、以下のように概略まとめられる。青年期の始めには、生後18ヶ月から36ヶ月の「分離個体化 (Mahler, 1964)」の時期におきた自己表象と対象表象の分化過程が繰り返される。彼はこれを、分離個体化期に体験される「母親から離れたい、でも戻りたい」という葛藤が再演し、母親および家庭から更に離れたいという欲求が高まる過程 (Masterson, 1972) として説明している。この理論構成からは、境界例様態を示す青年期患者のなかにも、病理ではなく、発達上の揺れとして症状をあらわす一群があることが想定される。これによって、青年期心理障害や不適応を査定する際に、心的反応の顕現様態のみで病理を診断することは危険であり、分離個体化期に固着しているのか、分離個体化の青年期における再演なのかといった発達のアセスメントの重要性がより明確になったと言うことが出来よう。

Erikson (1959, 1968) も、病理的な様態を呈する群の中に、青年期の発達上の揺れを見出した理論家であった。彼は、漸成発達理論にもとづき、青年は心理社会的に自らの同一性を安定的に定める自己同一性を確立させるといふ、自己同一性発達理論を提唱した。しかしながら社会的影響を受けやすい青年にとって、能動的に同一性を検討し、同一性を選択していく営みは容易ではない。その探求の最中には、精神病や境界例のような顕現様態を露にする青年も珍しくないことを Erikson (1968) は示唆した。彼が青年期の臨床査定に寄与したのは、青年期に現れる行動的、心理的問題が、自己同一性に向かう発達過程の一位相にあることを理論化したことであろう。つまり、行動上は病理的な問題も、精神的には発達促進的な揺れであることが多いにあり得ることを指摘したのである。

さらに Blos (1962, 1967) は、青年期のはじめに伴う衝動の増大とともに、プレエディパルな不安やエディプス葛藤が再浮上することを、より

明確に論じた。分離個体化の課題が青年期の文脈において再燃することを「第二の分離個体化」と名付けたのも Blos (1967) だった。彼は、潜伏期の成熟課題を概観したうえで、青年期の発達段階を様相ごとに区別し、「前思春期」「思春期初期」「思春期中期」「思春期後期」「後思春期」の配列を描いた (Blos, 1962)。その上で彼は、それぞれの発達段階を特徴づける対象関係と不安の様態を描き、それらの不安を自我が克服しようとして発達する自我機能を整理した結果、青年期の下位の発達段階ごとの成熟課題の大枠をまとめた。これによって、青年が示す (a) 対象関係と不安、(b) 自我機能、(c) 成熟課題の次元から、青年期のどの下位段階に発達の停滞があるのか、どのような課題が達成されてきているのか、を査定することが可能になった意味は大きい。

また、Jacobson (1961) は対象関係論を自我心理学の視点からまとめた。彼女は最早期から青年期にわたる自己表象と対象表象のユニットの変遷を整理し、それにとまなう自我機能の発達をまとめている。Jacobson (1961) の青年期の発達理論への貢献は、別々に発展してきた二つの発達論、対象関係発達と自我機能発達の統合をはかることで、表象と自我の二次元から青年を理解していく大枠を提示したことだと考える。自己表象と対象表象が発達早期のようであったとしても、自我機能をみたときに発達の高次の機能が動いている場合には、青年は病理を示しているのではなく、発達の揺れを体験している可能性があることを想定できる論拠が明瞭になった。

青年期発達理論の展開は、青年が示す問題が、青年期以前の取りこぼしの現れなのか、青年期らしい発達のうへで必然的な揺れなのかを識別するダイナミズムの検討によって前進して来たと言ってもよからう。とりわけ、不安、自己表象と対象表象、自我機能、発達課題を機軸とする変数間関係とその力学研究であるが、未解決の課題が多く残されている。思春期及び青年期臨床の成果が問われる、自己破壊症候群、引きこもり、うつ及び身体化症候群の蔓延化にその課題の重さを見ることが出来よう。

このような青年期発達理論の伸展と、残されている多くの課題に対して、同一視編成理論は、具体的にいかなる貢献をしているのだろうか。同一視編成理論の独自性と有用性はどこに見出されるのだろうか。

同一視編成理論は、11～13歳の青年期初期に着目したものである（Besser & Blatt, 2007）。この時期を、青年期の同一性獲得における一段階として重要視したことの意味は大きい。Erikson（1959）にしても Jacobson（1961）にしても、青年期を大きくひとくくりの発達段階として論じている。それに対し、先の Masterson（1972）はこの時期の始まりに、分離個体化の葛藤が再び浮き上がり、自己同一性を獲得する発達課題があると述べた。Besser & Blatt（2007）の理論は、この論点を進めているということが出来よう。同一視編成理論は、青年期における発達段階を包括的に捉えて危機を論ずるのではなく、青年期初期に最初の発達ラインの分水嶺ともいべき山場が訪れることを立証しようとしている。

同一視編成理論が、父—母—子の三者関係の確立が前提となっている（Besser & Blatt, 2007）ことは既に述べた発達ラインの観点から明瞭であろう。この点に関して、これも繰り返しになるが、Blos（1962）が明瞭に青年期におけるエディプス葛藤の再浮上の過程の重要性を前提においている。Masterson（1972）も、「家庭から離れたという欲求が高まる」起点に言及し、家庭との間に生ずる集団力学に着目している。Erikson（1959）が、集団同一性の理論を提唱している背景に、家族集団があることは言うまでもない。同一視編成理論において、青年期初期における父—母—子の三者関係が、内的表象世界に影響していることが理論化されている前提は揺るがすことはできない。この点において、Besser & Blatt（2007）は内在化機構に関する自我機能の発達をおさえた上で（Blatt, 1974）、取り入れ—投影や同一視による表象形成の文脈に、三者関係を前提とする同一視編成を定位している。青年がもつ自己表象と対象表象に焦点をあてることで、三者関係とそれに伴う葛藤について分析的介入をおこなっていく端緒を

ひらいたと考える。

三者関係を前提にしたうえで、さらに、同性親との二者関係表象に着目している（Besser & Blatt, 2007）ことは精神分析理論の実証的精緻化を進める上で、特筆に値する。同一視編成理論では、青年期初期には、男子においては母親からの独立と父親への同一視の凝集、女子においては母親への成熟した同一視が、発達上必要となることが理論の中核を成す。精神分析における発達理論の概要において認められているものの、この時期における青年の同性親との精神的結びつきを発達課題の特定変数として言及している研究は、Blos（1962）や Deutsch（1973）を超えるほどのものはない。Besser & Blatt（2007）はそれらの理論を踏まえたうえで、この時期の三者関係内の青年と同性親のつながりが、対象表象にどのように現れるかを実証的変数として抽出するところまで理論化を進めた。青年期初期における内的対象関係の発達原理の実証性を高めたと評価して良いであろう。実証的変数化は、同一視編成理論が、対象表象とくに同性親と青年の同性二者関係における表象化に焦点を当てることによって可能となっている。三者関係を前提としている点において、同一視編成が「陰性エディプスコンプレックス（Nagera, 1970）」への偏向とは異なることは言うまでもない。しかしながら、同一視編成理論と「陰性エディプスコンプレックス」とを如何に識別していくかは重要な課題であるに違いない。Blos（1980）は、陰性エディプスコンプレックスの克服過程において、同性対象の表象がより現実的になっていくことを指摘している。Besser & Blatt（2007）によって理論づけられた対象表象の一致性・凝集性のなかには、成熟した同一視による、対象表象の過剰な理想化が解消され、現実性が増していく過程も含まれている。陰性エディプスコンプレックスへの偏向が起きている場合には、理想化が強すぎるため、対象表象が非現実的なものとなり、表象の一致性は低いものとなる。一方、陰性エディプスコンプレックスを乗り越える過程に入っている場合には、同性親表象はより現実的なものとなり、表象の一致性および凝集性も高

い。同一視編成は、陰性エディプスコンプレックスを克服していく過程に個人が入っていることを意味していると、言い換えることもできよう。

これらの同一視編成理論の独自性を踏まえ、同一視編成を、青年期における重要な発達領域を捉え、分析し、査定し、徹底操作過程（working through process）を進めていく一基軸として定位することができるだろう。同一視編成理論は、分離個体化の葛藤の浮上（Masterson, 1972）から青年期固有の自我同一性探究（Erikson, 1959）の転回点の力動を明らかにするものと期待できる。臨床的には、青年がもつ両親の表象の様態を査定することで、度々困難患者とさえ呼ばれる極端な障害に見える青年の行動上・情緒上の問題にさえ、発達促進的な揺動かあるいは基底欠損（Balint, 1979）の問題かを早い時期に識別することを可能にする。

青年期初期の発達メカニズムの解明に、同一視編成理論が有用であることに疑いはないが、青年期初期という嵐の時期に、同一視編成はどのような発達の貢献をするのだろうか。Besser & Blatt (2007) による同一視編成の青年期初期の発達課題としての位置づけについての論を概観し、同一視編成の発達理論における意味を明瞭にしていこう。

### 3. 同一視編成の青年期初期発達における意味

#### 3.1 同一性形成に与える影響

潜伏期から青年期に進んでいく第一段階として、家族から独立する心理社会的な課題を担う青年期発達を駆動する鍵として同一視編成を位置づけるなら、自我同一性に向かう青年期初期における発達課題とみなすことができる。Besser & Blatt (2007) は、同一視編成理論を、Erikson (1968) の自我同一性理論の流れに定位している。彼らはEriksonの漸成発達理論を前提として置いた上で、「青年期初期における十分な同一性を確立する不可欠な要素として、同一視編成がある（Besser & Blatt, 2007, pp.139）」と述べている。さらに「もし（同一視編成が）早い段階に克服されているな

らば、（個人は）青年期に固有の、身体的・情緒的・社会的圧力を扱うことができるだろう（Besser & Blatt, 2007, pp.140）」と論じているところから、同一視編成を獲得していることは、青年期の種々の課題を乗り越えるための前提となることを想定していると言えよう。同一視編成が、その後の青年期の自我同一性発達に寄与する発達課題であることを主張している。では、同一視編成は、青年期初期におけるどのような同一性形成に具体的に寄与するのだろうか。Besser & Blatt (2007) の理論を見ていこう。

#### 3.2 性別特異的な同一性発達

同一視編成を、自我同一性発達の第一段階と位置づけ、自我同一性は種々の同一性群が統合されたものとしてみなすなら、青年期初期のどのような同一性形成に寄与するのだろうか。青年期の境界線となる「puberty」、つまり第二次性徴のはじまりと性器性の搭載による特定の同一性の変化に与える影響を見逃すことはできない。男性と女性の発達を比較することで発達論を展開してきた理論（Muuss, 1996；Steinberg, 1996）は、男性においては、同一性は分離（separation）と自律性（autonomy）に焦点が置かれて発達し、女性の同一性は愛着と親密性に焦点が置かれて発達する（Blatt & Blass, 1990；Steinberg, 1996）と主張してきた。その理論的背景のもと、Besser & Blatt (2007) は、同一視編成がこの時期の性別同一性（gender identity）の進展に寄与する、と想定している。その上で、同一視編成がこの時期の性別同一性の発達にどのように影響するのか、男子と女子を別々に論じている。

男子については、Besser & Blatt (2007) は、同一視編成によって、青年期のはじまりに再浮上する分離個体化の課題を越えることができると推定した上で、男子は自らの男性性（masculinity）を主張するようになる（Gilligan, as cited in Browne, 1987）と述べている。さらに、Steinberg (1996) に基づき、男子は依存と親密性に対して葛藤的な反応を持ち、その代わり彼自身を成果によって自ら定義するようになる、と推察している。まとめ

ると、同一視編成は、男子の青年期初期の性別同一性の中でも「成果による自らの定義」に寄与するということが、同一視編成理論の中で仮定されていると見る事が出来よう。

一方の女子について、Besser & Blatt (2007) は、同一視編成によって、青年期のはじまりの不安を乗り越えることができると想定した上で、女子は自らの女性性 (femininity) を感じるようになる (Gilligan, as cited in Browne, 1987), と推察している。さらに、Muuss (1996) を踏まえて、女子は養育者に対する同一視を維持することを通して、より親密な関係を形成することに対して有能感 (competence) を持ち、人生における重要な人物に対して自分が与える影響によって、自らの同一性の感覚を持つ (Muuss, 1996) と想察している。ここまでの理論をまとめると、同一視編成は、女子の青年期初期の性別同一性の中でも、「親密な関係を形成することへの有能感」に寄与することが、同一視編成理論の中で仮定されていると言えよう。

このように、Besser & Blatt (2007) は、同一視編成が青年期初期における性別同一性の進展に寄与すると主張しており、男女それぞれにおいて性別同一性を構成するどのような要素に同一視編成が影響するのかまで理論を構成している。Blos (1962) は、青年期初期には生殖機能が完成し、性器性が発達課題の中心に入ってくる、と述べている。この点からも、同一視編成がこの時期の男性性と女性性の進展に対して寄与すると仮定するのは妥当なことだろう。彼らが主に準拠している理論も、性別ごとに発達の種々の様相を調査研究によって比較して展開してきた理論であり、性別の比較という側面からみると、これらの理論の妥当性の高さは検証されている通りである。

しかしながら、彼らの理論的考察には、同一視編成の青年期初期における性別同一性への影響を仮定しながらも、精神性的発達理論が含まれていない。実際、彼らは同一視編成を概念的に抽出する際に、精神性的発達理論を前提としてはいるが (Blos, 1962 ; Deutsch, 1973 ; Freud, 1905/1953 ; Lample-de Groot, 1927, 1960 ; Ritvo, 1976 ; Ticho,

1972a, 1972b), 発達促進的な影響としての性別同一性を論ずるにあたって、精神性的発達理論を用いていないのである。これには不自然な印象を受ける。精神性的発達理論を生み出してきた精神分析学において、性別同一性が、エディプス期に、父—母—子の三者関係における葛藤のなかで、同性親—子の二者のダイナミズムを通して形成され、青年期初期に性器性を搭載することで独特の様相を呈して性的同一性 (sexual identity) が形成されていく (Blos, 1968) ことは周知の事実であろう。この性別同一性の展開期において、同性親—子の二者関係の対象関係に着目したことは Besser & Blatt (2007) の慧眼である。しかしながら、精神性的理論を踏まえずして性別同一性を云々することは片手落ちの感がある。精神性的な発達理論を概観し、性別同一性の青年期初期におけるダイナミズムの中で、同一視編成が果たす意味をより明らかにした発達理論の再構成が必要だと言える。論の再構成の作業については稿を改めるが、精神性的発達理論に基づく性別同一性発達を包含する同一視編成理論を再構成していくことによって、臨床発達査定との整合性はより高まっていくだろう。Blos (1968) は「性別同一性 (gender identity) は早期に成立するが、思春期 (puberty) をむかえ、性的成熟に不随して、遅ればせながら、性的同一性 (sexual identity) がはっきりと出現する。その性的同一性は不可逆的であり、パウダリーが安定する (Blos, 1968, pp.257)」と述べている。同一視編成をこの力動の中に位置づけていくことで、青年期初期における性別同一性から性的同一性への展開力動と、境界の安定性についてより詳細に明らかにしていける可能性がある。これによって、同一視編成の不全が、いかに同一性の形成困難に影響し、そして、この時期の行為的及び情緒的な問題といかに関連するか、そのメカニズムの検討への路を拓くことにもつながるであろう。

さて、青年期初期の同一性形成の中でも性別同一性の展開メカニズムの解明に、同一視編成理論が有用であることに疑いはないが、実証的、臨床的にその有用性の検証はどこまで進んでいるのだ

ろうか。理論の体系性と精緻性は十分に、実証研究や臨床研究に耐えるものに精練されているだろうか。問題は多く残されているように思える。次章で検討をおこなう。

#### 4. 実証研究における課題

同一視編成理論についての最もまとまった実証研究としてBesser & Blatt (2007)による研究を挙げることができる。彼らは同一視編成の不全が生じている群、つまり、異性親表象が同性親表象に比べて凝集している者に着目し、攻撃行動や非行の外向的問題と不安や抑うつ、身体化の内向的問題 (Accehbach, 1991) との関連を調査している。

彼らの調査結果では、男子の同一視編成の発達不全群すなわち、母親表象が父親表象にくらべて凝集している者は、同一視編成の健全発達群すなわち、父親表象が母親表象にくらべて凝集している者と比較して、有意に高い外向的な問題を呈していた。一方、父親表象が母親表象にくらべて凝集している女子の同一視編成の発達不全群は、母親表象が父親表象にくらべて凝集している同一視編成の健全発達群と比較して、有意に内向的な問題を呈していた。つまり、男子と女子の両方で、同一視編成の発達上の不全が、青年期の行為および情緒的な問題の表出と関連していた。このように同一視編成不全が青年期特有の問題と関連することが確認されたことは、青年期初期における同一視編成の発達課題の重要性を裏づけるものと考えられる。また、この研究で男子は外向的問題と関連し、女子では内向的問題と関連していることが示されたことで、同一視編成に性別特異的な影響があることが示唆されている点も興味深い。しかしながら、この研究には、厳密にはいくつかの課題がある。

まず、同一視編成の正常発達群について男子の結果から、実証性の課題が見出される。Besser & Blatt (2007)による研究結果では、男女の両方で、大多数の参加者は、母親表象が父親表象に比べて凝集性・一致性が強かった。これは同一視編成理論で説明されている、同性親表象が異性親表

象に比べて凝集するという論旨からすると、男子においては理論どおりではない結果を示している。同様の結果が、荻本による研究 (2009a, 2009b)でもみられた。先行研究 (Besser & Blatt, 2007)と同じ方法で青年期初期の両親表象を査定したところ、男女の双方で、多くの者において母親表象のほうが父親表象に比べて凝集性が高く、男子の結果は理論とは異なる結果だった。なぜこのような結果が得られたのだろうか。

男子において理論とは異なる結果が得られた背景に、両研究ともに青年期初期を歴年齢でとらえたことがあると考える。Besser & Blatt (2007)は、青年期初期を「11歳から13歳」と操作的に定義している。女子において母親表象が父親表象に比較して凝集していた結果は、確かに、11歳から13歳には青年期初期の成長過程にある個人が含まれたと考えられる。しかしながら、男子の多くの被験者で母親表象が父親表象に比較して凝集していた結果は、彼らが心理発達のには青年期初期にはいないことも考えてみなければならない。一般に、青年期を特徴づける第二次的徴などの発達は、男子は女子に比べて二カ年ほど遅いと言われている (高石ら, 1988)。これらの研究結果 (Besser & Blatt, 2007; 荻本, 2009a, 2009b) が示唆しているのは、男子の11歳から13歳は、青年期初期と言うには早すぎたという可能性の高さである。今後の研究を進めていくにあたって、男子はある程度の年齢の幅をとって、実際に理論通りに父親表象が母親表象よりも凝集する年齢があるかどうかを確認する必要があるだろう。

次に、同一視編成の発達促進的な意味について実証的な検討を行っていないことが指摘される。Besser & Blatt (2007)が行った研究では、同一視編成の不全が、行動上および情緒的な症状と関連することを確かめるものであった。ある発達課題の不全群に着目し、独立変数に症状において実証的な検討を行うことは、臨床群に対する査定理論と介入理論を進める方向性としては妥当ではある。彼らの研究によって、青年期特有の問題に際して介入が必要な領域として、同一視編成の重要性を主張することまでは可能だろう。しかしなが

ら、不全群を対象にするのみでは、同一視編成は介入の必要がある領域として推定されるにすぎず、同一視編成を発達課題とする証拠にはなり得ない。これを越えるには、同一視編成が健全に発達している者を対象群に据えて、青年期初期の発達テーマの展開と関連しているかを実証する研究を行わなければならない。同一視編成の発達促進的な意味について明らかにしていくこと抜きには、青年期初期過程の発達理論の解明には及ばない。それによって、発達理解を踏まえた具体的な介入理論と介入技法もより明確になろう。さらに、同一視編成の不全と症状的行為の間のメカニズムを検討することにもなる。

## 5. 結論

最後に、同一視編成理論の発達理論としての位置づけと、実証研究における課題から、今後の研究展開可能性について、以下の提言をもって結論とする。

「子どもの同性親の表象が異性親の表象よりも強い同一視の凝集性もしくは一貫性を持つ」と定義される青年期初期の同一視編成 (Besser & Blatt, 2007) は、青年期初期における発達課題として位置付けられる。同一視編成理論は、父—母—子の三者関係を前提として、青年期初期の同性親と子の二者関係に焦点化したことにその独自性と有用性を見出せる。本理論によって、分離个体化の葛藤の浮上 (Masterson, 1972) から、自我同一性の探求 (Erikson, 1959) への転回メカニズムが明瞭になると期待できる。臨床的には、同一視編成の一翼を担う同性親表象の様態の査定によって、青年にみられる行動上および情緒上の問題が、発達促進的な揺動か、潜伏期の失敗なのか、あるいは病理的な問題なのか (Blos, 1962; Balint, 1979) を識別していけると言えよう。

理論の体系性を評価したとき、同一視編成が青年期初期における性別同一性の展開に与える影響を、精神的発達に基づいて理論を再構成していく必要性が浮上した。エディプス期に端を発する性別同一性に基づく青年期初期の性的同一性の発

達という変遷を踏まえた発達論のなかで、同一視編成の果たす意味を再構成していく必要があるだろう。

また、同一視編成理論の実証研究における課題として、男子において同一視編成が優勢に発達する時期の有無が確認されていないことが挙げられた。今後は、青年期初期における同一視編成の発達促進の意味について、実証的な検討を行っていくことが必要である。

## 引用文献

- Acchebbach, T. M. (1991). *Integration guide for the 1991 CBCL/4-18, YSR, and TRF profiles*. Burlington, VT : University of Vermont, Department of Psychiatry.
- Avery, R. R., & Ryan, R. M. (1988). Object relations and ego development: Comparison and correlates in middle childhood. *Journal of Personality, 56*, 547-569.
- Balint, M. (1979). *The basic fault: Therapeutic aspects of regression*. London/New York; Tavistock Publications.
- Besser, A. & Blatt, S. J. (2007). Identity consolidation and internalizing and externalizing problem behaviors in early adolescence. *Psychoanalytic Psychology 24*(1), 126-149.
- Blatt, S. J. (1974). Levels of object representation in anaclitic and introjective depression. *Psychoanalytic Study of the Child, 29*, 107-157.
- Blatt, S. J. & Blass, R. B. (1990). Attachment and separateness: A dialectic model of the products and processes of psychological development. *The Psychoanalytic Study of Child, 45*, 107-127.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York, NY: Free Press. (ブロス, P. 野沢栄司 (訳) (1971) 青年期の精神医学 誠信書房).
- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child, 22*, 162-186.
- Blos, P. (1968). Character formation in adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child, 23*, 245-263.
- Blos, P. (1980). The life cycle as indicated by the nature of the transference in the psychoanalysis of adolescents. *International Journal of Psycho-Analysis, 61*, 145-151.

- Bronwne, A. (1987). *When battered women kill*. New York, NY: The Free Press.
- Deutsch, H. (1973). *Confronting with myself*. New York, NY: Norton.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and life cycle*. New York, NY: International Universities Press (エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳) (1973) 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—誠信書房).
- Erikson, E. H. (1968). *Identity; Youth and crisis*. New York, NY: Norton. (エリクソン, E. H. 岩瀬庸理 (訳) (1973) アイデンティティ—青年と危機—金沢文庫).
- Freud, S. (1953) Three essays on the theory of sexuality. In Strachey (Ed. and Trans.), *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud* (Vol. 7, pp125-245). London: Hogart Press. (Original work published (1905).)
- Jacobson, E. (1961). Adolescent moods and the remodeling of psychic structures in adolescence. *Psychoanalytic Study of the Child*, 16, 164-183.
- Jones, E. (1948). Some problems of adolescence. In *Papers on psycho-analysis* (pp.389-406).
- Kotani, H. (2004). Safe space in a psychodynamic world. *International Journal of Counseling and Psychotherapy*, 2, 87-92.
- Lample-De Groot, J. (1927). The evolution of the Oedipus complex in women, In *The development of the mind: Psychoanalytic papers of clinical and theoretical problems* (pp.3-18). New York, NY: International Universities Press, 1965.
- Lample-De Groot, J. (1960). On adolescence. *The Psychoanalytic Study of Child*, 15, 95-103.
- Mahler, M. S. (1964). Thoughts about development and individuation. *Psychoanalytic Study of Child*, 18, 307-324.
- Masterson, J. F. (1972). Treatment of the borderline adolescent: A developmental approach. New York, NY: John Wiley and Sons, Inc. (マスターソン, J. F. 成田善弘・笠原嘉 (訳) (1979) 青年期境界例の治療 金剛出版).
- Masterson, J. F. (1985). *The real self –A developmental self and object relationships approach*. New York, NY: Brunner/ Mazel, Inc.
- Moffitt, T. E. (1993). Adolescence-limited and life-course-persistent antisocial behavior: A developmental taxonomy. *Psychological Review*, 100, 674-701.
- Muuss, R. (1996). *Theories of adolescence*. New York, NY: McGraw-Hill.
- Nagera, H. (1970). Children's reactions to the death of important objects-A developmental approach. *Psychoanalytic Study of the Child*, 25, 360-400.
- 荻本快 (2009a). 前思春期における同一視編成の再検討. 国際基督教大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊).
- 荻本快 (2009b). 前思春期における同一視編成 consolidated identificationの再検討. 第28回日本心理臨床学会発表論文集, 212.
- Ritvo, S. (1976). Adolescent to woman. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 24, 127-137.
- Roberts, R. E., Andrews, J. A., Lowinsohn, P. M., & Hops, H. (1990). Assessment of depression in adolescents using the Centre for Epidemiologic Studies Depression Scale. *Psychological Assessment*, 2, 122-128.
- Ryan, R. M. & Lynch, J. H. (1989). Emotional autonomy versus detachment: Revisiting the vicissitudes of adolescence and young adulthood. *Child Development*, 60, 340-356.
- Steinberg, L (1996). *Adolescence* (4th ed.). New York, NY: McGraw-Hill.
- 高石昌弘 (編著) (1988). 発達段階からみた身体発達の特徵 からだの発達 (改訂版) 大修館書店.
- Ticho, E. (1972a). The effects of the psychoanalyst's personality on psychoanalytic treatment. *Psychoanalytic Forum*, 4, 135-172.
- Ticho, E. (1972b). Termination of psychoanalysis: Treatment goals, life goals. *Psychoanalytic Quarterly*, 51, 315-333.